

多摩川改修の時代（1916～1930）その8

《石油コンビナートの始まり》

関東大震災の翌年である1924年（大正13）に、石油会社の「日石」（JXエネルギー）は、鶴見製油所（注1）を建設します。これが、京浜工業地帯が石油コンビナートになる原点でした。

「日石」は、新潟県などで国産の原油を生産し精製する会社でした。第1次世界大戦以降、石油は、灯火燃料としてだけでなく、ガソリンエンジンが開発普及し、船や車の動力燃料として需要が急増していきます。

日本では、第1次世界大戦まで国産原油を増産して対応していましたが、限界に近づきます。一方、世界では、大戦後、石油生産に余裕が出てきたことから、原油を輸入し、精製する方式に転換したのです。

当時、外国資本の石油会社としては、横浜を拠点とする「ライジングサン石油」（現昭和シェル石油）がありました。この会社は、三浦半島で採取した貝を宝飾用に加工し、イギリスで販売して財を成したサミュエル商会がルーツであり、現在も、名前やロゴに貝を使用しています。

こうした状況下、大震災の復興により、東京市、横浜市においてアスファルト舗装がなされたのです。アスファルトは、原油精製の残留分であり、いわば廃棄物です。その処理として、道路舗装材として使用されたわけです。

道路行政は、世界と軌を一にして、自動車の普及、石油産業の育成を後押ししたことになります。石炭のガス抽出後に出てくるコールタールも、アスファルト材として使用されていましたから、石炭産業をも支えたと言えるでしょう。

注1：鶴見製油所は、1945年（昭和20）に空襲で壊滅し、その後閉鎖。現在は、米軍の鶴見貯油施設となり、航空燃料を貯蔵しています。在日米軍の貯油施設として最大級であり、鶴見線・南部線・青梅線ルートを使って横田飛行場へタンク列車で輸送するとともに、タンクローリー車で厚木飛行場まで輸送しています。

写真は、①鶴見製油所（現米軍貯油施設）、②昭和シェルのロゴ（昭和シェルHP掲載写真を一部トリミング）、③国内原油・製品量と輸入原油・製品量（石油便覧HP掲載資料）

①



②



③



(単位:千kl)

年	国内生産		輸入	
	原油	製品	原油	製品
1914	434	313	9	155
1915	477	402	18	149
1916	470	395	10	105
1917	454	400	12	91
1918	387	352	5	123
1919	355	294	10	171
1920	352	282	16	184
1921	354	288	43	145
1922	326	228	90	213